

田中城の戦いを熱弁!

3月6日(土)から、三加和公民館で文化庁「地域文化芸術振興プラン関連事業」として、肥後の歴史物語と民話の会「語り座」(寿咲亜似代表)の公演が開催されました。

第一部は、今の時期にピッタリの「さくらさくら」の箏独奏で始まり、地元の昔話をアレンジされた「和仁川に石のない訳」や「はなたれ小僧さん」では、熊本弁を交えたユーモアたっぷりの語りに笑い声がおこっていました。民謡も、「黒田節幻想曲」などに長洲町の民謡もあり、すばらしい唄声が披露されました。

第二部は、箏・三味線・鳴り物との共演で「天正物語～南の関、和仁と大津山」を寿咲さんが熱弁されました。和仁人鬼親宗と南蛮娘の逸話に始まり、国衆一揆に至る経緯、田中城での戦いの様子などを情感たっぷりに語られ、約100人の参加者は聞き入っていました。



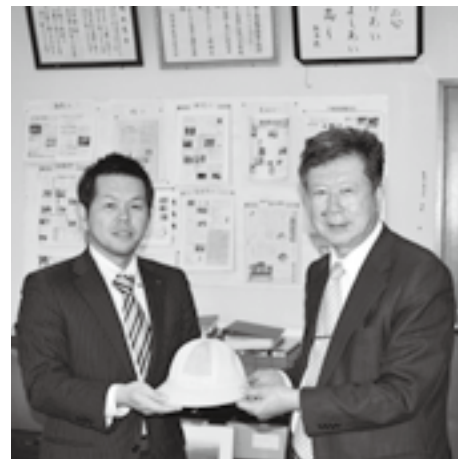
▲寿咲亜似さんらによるコンサート

新1年生に黄色の帽子寄贈

3月2日(火)、町商工会青年部(櫻井謙臣部長)から新入学児童に登下校時に着用する黄色い帽子が寄贈されました。

これは、町商工会青年部が地域貢献活動の一環として毎年行われています。

今年は、櫻井部長が訪れ、教育長に「毎日安全に楽しく元気よく登校してください。」と手渡されました。黄色い帽子をかぶって登下校する児童の姿を見られたら、安全運転に心がけてください。未来の和水町の担い手である子ども達の健やかな成長を願って、地域に貢献される商工会青年部の皆さんありがとうございました。



▲帽子を教育長に手渡す櫻井さん(左)

「なごみ『大好き!』観光写真コンテスト」開催結果及び展示会開催

平成21年度、当町の観光PRを目的に「なごみ『大好き!』観光写真コンテスト」を開催しました。

県内外から61人220点の応募があり、審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞5点、入選15点、町観光協会長賞1点の計22点の入賞作品が選ばれました。

なお、上位入賞者は次のとおりです。

●上位入賞者

○最優秀賞

首藤 健富 さん(宇土市)「子ども修羅レース」

○優秀賞

大島 祐二さん(熊本市)「休息のひとつき」

早川 昇さん(玉名市)「若き舞い手」

右田 哲也さん(荒尾市)「桜の咲く頃」

甲斐田 湊さん(八女市)「武将にあそぶ」

椎葉 国忠さん(湯前町)「黄昏」

○町観光協会長賞

後藤 将博さん(熊本市 旧植木町)「水と親しむ」

また、次のとおり、入賞作品の展示会を開催しますのでご覧ください。

3月24日(水)～4月 7日(水) 肥後民家村旧布施家住宅
4月13日(火)～4月17日(土) びぶれす熊日会館6階熊
本公聴会ギャラリー

4月27日(火)～5月 9日(日) 三加和温泉ふるさと交流センター



▶
最優秀賞に選ばれた首藤 健富さんの作品「子ども修羅レース」

歴史調査の楽しみ方

日平城跡

（歴史編の4）

熊本県立装飾古墳館 館長

大田 幸博

（元・菊水町史編纂委員会副委員長）

日

平城跡の縄張りで、最も見応えのある遺構は「堅堀^{たてぼり}」です。北東側の幅広い山腹を真^ま文字に下る有様は、圧巻です。

私達は、蜻浦^{へばうら}集落を経由して林道を普通車で上がります。15分くらいで峠の切り通しに到着すると、車を下りてV郭まで長さ約200mの尾根道を歩かねばなりません。

一方、四輪駆動の軽トラックは、そのまま進行可能ですから、町教委の居石参事が測量機材などをV郭に運び込みます。調査に際して、林道と軽トラの存在は、大きいです。

堅堀1は、堀切3の北端から始まります。堀切3はV郭とⅢ郭を直線的に断ち切る防禦施設ですが、北端で鉤型にカーブを描き、そこから堅堀に変化して、北東側に山腹を下ります。この造りに大きな特徴があるのです。

というのも、堀切の多くは、尾根の括れ部に設置されています。このような箇所には、両側から小谷が食い込んでいます。そこで、尾根筋をやや浅く掘り残して土橋^{どばし}とします。そして両側の小谷

に大きく手を加えて、二本の堀切に仕立てるのです。したがって、堀底の端部は、直線的に谷部と繋がりますから、ここにも少し手を加えて堅堀にします。このように、堀切と堅堀はセット関係にあり、地形の括れと谷部を利用した防禦施設なのです。

ところが、前述した様に日平城の場合は根本的な違いがあります。堀切3と堅堀1は繋がっていますが、第一、向きが異なります。それに、堅堀1は谷部を利用しておらず、幅広い山腹をそのまま下っています。更地に堅堀を造っていることになるのです。谷部を利用した場合よりも、何倍もの手間がかかります。

さらに、堅堀1の両肩部には、大土塁^{どろい}が積まれています。普通は、傾斜が低い方の片斜面だけに排土を積み上げるのですが。

堅堀1の規模は、真ん中程で、上場幅（土塁間の距離）が15m、下場幅（堀底幅）が5m、図面上での長さは85mにもなります。これ程の規模の大きな堅堀を造るには、機械も無い時代にどれ位の人が働いたのでしょうか。そして、どこか

ら人材が確保されたのでしょうか。

城造りの場合、緊急性が求められます。そうなるべくと、より多くの労働力が必要となります。莫大な労賃も必要となります。熟考すると分らない事だらけです。

それ以外にも、大きな問題があります。城の維持管理は、どの様に実施されていたのでしょうか。梅雨明けから真夏にかけて、城地は、一気に下草が繁茂します。豪雨に見舞われれば土砂崩れが発生します。大風が吹けば木も倒れます。この様に、天気は左右されて、様々なケースが生じます。結局、城造りが完成しても、後の困難なメンテナンスが必

要となります。

城地に関しては歴史ロマンを感じる一方で、どうしても現実的な問題が生じます。この事が、城研究の大きな課題となります。

それにしても、有事の対策は金がかかります。そして戦いが無ければ、無駄な投資の様に受け取れます。しかし、戦いに備えるためには、避けて通れないことなのです。二分一秒の危機を回避するための守りなのです。その様に理解しなければなりません。山鹿市の古代山城の鞠智城^{きくちじょう}も、その様な意味で築造されています。



▲日平城跡測量図(矢印は写真撮影位置)



▲堀切3北端から堅堀1へのカーブ地点